(f) カモフラージュ, (g) 帰海の7つに類別され(松沢, 2012), このうち(d)の段階まで進むと, 以降は人が近づき観察しても最後まで産卵行動を行うとされる(環境省, 2007). 今回ノネコに干渉されていたアカミミガメは上記の類別では(e)または(f)の段階に相当するものと考えられた. 今回の観察結果からアカミミガメもウミガメ同様に産卵後に外部から干渉があっても産卵行動は継続するということがわかり, 興味深い.

引用文献

早瀬長利. 2008. 茨城県自然博物館野外施設におけるミシシッピアカミミガメの産卵記録. 茨城県自然博物館研究報告 (11):21-23.

環境省. 2007. 足跡の判読と産卵個体への注意. p.26. ウミガメ保護ハンドブック. 環境省自然環境局, 東京.

松沢慶将. 2012. 繁殖生態－交尾と産卵. p.115-140. 亀崎直樹(編) ウミガメの自然誌—産卵と回遊の生物学. 東京大学出版会, 東京.

足立区におけるニホンイシガメの記録

辻井聖武

190-0022 東京都立川市錦町2-1-22 株式会社 自然教育研究センター

Records of *Mauremys japonica* in Adachi, Tokyo

By Masamu Tsujii

Center for Environmental Studies, 2-1-22, Nishiki-cho, Tachikawa, Tokyo 190-0022, Japan

東京低地に位置する足立区は, 淡水棲カメ類の生息状況を記録した資料が極めて少ない. ニホンイシガメ*Mauremys japonica*(以下, イシガメ)の生息に関する情報もなく, 有識者への聞き取り調査からも見たことがないとの返答が多かった. ところが2014年の区内の広域的な調査からクサガメ*M. reevesii*との交雑の疑いがある孵化幼体が記録され, イシガメの生息の可能性が示唆された(辻井, 2021). その後, 足立区内でのイシガメの生息状況を調査してきた結果, 新たに3例のイシガメが確認されたのでここに報告する.

1例目は, 2019年6月22日の18:00過ぎに2014年に実施した生息状況調査の対象調査地点である河川付近の陸上で発見された(図1a). 確認場所の詳細は, 過度な採集や別地域への移動を避けるため伏せておく. 個体は僅かながら成長停止線が認められ, 1齢の幼体と推定された. 尾の欠損はなく, 背甲長はおよそ5cmであった.

2例目は, 2020年6月18日の11:00～12:00の間に1例目とは別地点で目視によるルートセンサスの調査時に確認された. 個体は抽水植物の間を遊泳しており, しばらく水面から頭部を出していた. 捕獲ができない距離にあったため, 高倍率ズームが可能なデジタルカメラ(SONY α77 ; SEL70300G)にて撮影した(図1b). 個体は外見上, イシガメと判断した.

3例目は別地点で2021年10月3日の12:00～13:00の間にルートセンサスの調査時に確認された. 中州で日光浴をしているところをデジタルカメラで撮影した(図1c).

1例目(2019年)の確認個体は幼体であったため, 野生由来であれば前年にイシガメと思われる個体から孵化したものが越冬後に現れたと推測される. 発見場所付近で孵化した幼体なのか上流域から流入してきた個体かは不明である. また, 飼育由来であれば, 屋外で飼育されていた個体か

図1. 足立区内で確認された各イシガメ(a：2019年６月22日撮影, b:2020年６月18日撮影, c：2021年10月３日撮影)

ら繁殖した幼体が逸出した可能性も考えられる. ２例目の個体(2020年)は, 目視上では外見的にイシガメであったが, 写真としては上手く全体像が残せなかった. ３例目(2021年)の確認個体は左右の第３肋甲板に凹みが見られた. 第３肋甲板の凹みは飼育個体の淡水棲カメ類やリクガメ類でもよく見られるが, この個体は飼育由来かどうかは判断できなかった.

以上の発見事例から, 足立区の複数地点において幼体含むイシガメが生息していることが明らかとなった. 2014年以降にイシガメの発見記録が増加したことは, 足立区では淡水棲カメ類に着目した調査自体がこれまで実施されていなかったために, イシガメを含む淡水棲カメ類の生息状況が明らかでなかったことに起因すると考えられる. 同じ東京低地に位置する葛飾区の遺跡からはイシガメが出土されていることから(葛飾区葛西城址調査会, 1994), 過去の東京低地にイシガメが見られたことが示唆され, 足立区においても僅かながらイシガメが存続していると考えられる. しかしながら, 足立区内にはこれまでに飼育由来の外来カメ類が数多く確認されていることから(辻井, 未発表), 確認されたイシガメが東京低地にもともと生息していた個体かどうか判断するのは難しい. 淡水棲カメ類の生息状況調査は今後も継続し, 罠かけなどの調査でより定量的な分布把握, そして遺伝子による東京低地個体群由来かどうかの判断を明らかにする必要があるだろう. また, 足立区内のイシガメが仮に東京低地にもともと生息していた個体群だとすれば, 確認事例数から個体群の存続はかなり危機的と想定されるため早急な保全活動を講じる必要があるだろう.

本稿を執筆するにあたり, 埼玉県在住の角山綾香氏には調査を手伝っていただいた. 株式会社自然教育研究センターの関根雅史氏, 遠藤耕一郎氏, 青山正志氏, 荒牧遼太郎氏にはカメの情報を提供していただいた. えどがわ生物懇話会の後藤康人氏には東京低地のカメの古文献の情報を提供いただいた. 以上の方々に心より感謝申し上げます.

引用文献

葛飾区葛西城址調査会. 1994. 葛飾区遺跡調査会調査報告31：葛西城ＸⅧ. 葛飾区葛西城址調査会, 東京. 226p.

辻井聖武. 2021. 足立区で確認されたニホンイシガメとクサガメの形態的特徴を持つ個体の記録. 亀楽 21:8-9.